

記録
16ミリ
カラー／28分

- 自主企画
- 協力
国立競技場
明石市教育委員会

スタッフ

- 企画
村山英治
- 製作
村山和雄
福間順子
- 脚本・演出
瀬藤 祝
- 撮影
原田英昭
- 照明
石橋 等
- 解説
川久保 潔

文部省選定 1974年教育映画祭優秀作品賞

この作品が企画された背景には、当時心身ともに健康な生活を送るために、積極的に体力作りをする必要を人々が実感し始めたことがある。映画は、現代生活におけるスポーツの必要性を具体的に明快に語って、また現代社会のコミュニティの形成にも好ましい役割をすることを豊富な実例で明らかにしていく。



週に2日、桜井さんは会社帰りに都心のスポーツセンターに通っている。社会生活も個人生活も便利になったあまり、身体的運動が減り、体力は低下し、現代病が増えている。

こんな時、運動不足やストレスをスポーツで解消しようという人たちが多くなっている。タクシー運転手の長山さんもスポーツセンターで汗を流した後、スポーツサウナで仲間と語り合うひとときを楽しみにしている。しかし。そういう人はまだ少ない。婦人や子供たちなど、誰もが地域で気軽にスポーツに親しむには、どうすればいいのだろうか。

兵庫県明石市の人たちは、居住区の中学校の体育館にコミュニティセンターを持っている。そこでの主婦たちの健康体操サークルでは、痩せたい、友達がほしいと、参加の動機は様々だ。

このサークルは、地域のコミュニティグループに発展している。家族連れも利用している。昼間は忙しい若者のグループは、夜集まってくる。明石市では学区ごとに中学校の体育館を改築し、コミュニティセンターとして地域の人々に開放した。施設の不足を補う過渡的手段だが、その管理運営を住民、各種団体、体育専門の指導員などの代表がそれぞれの意見を反映して意欲的に行なっている。集まってきた人々の中から、ボランティアとしてコーチを引き受ける人も出てきた。